

思い出探し隊 一枚でも多く住民たちのもとへ



▲作業テントの中で洗浄した写真を乾燥させる。

『まさか何もかも流されてしまうなんて』 住民の半数以上が家や家財を失い、着の身着のままになってしまったことを誰が想像していただろうか。

それぞれの宝物や思い出の写真も、幼い頃から慣れ親しんだ風景さえも、一瞬にして消えてしまい、津波で亡くした家族の面影を偲ぶことさえできなかった。

2011（平成 23）年3月末、瓦礫の中から写真や日記、名前が入った文房具やグローブ、位牌などを集め歩くボランティア活動が始まった。その活動は「思い出探し隊」と名付けられ、メンバーは当初7人だった。大分県から知人の安否を確かめようとやって来たスーパーボランティアで知られる尾畠春夫さんは、町の惨状を目の当たりにして、テントに宿泊しながらこの活動に参加した。やがて、行



▲家族や知り合いの写真はないか、
食い入るように写真を見つめる住民ら

方不明者を捜索する自衛隊や消防、警察なども瓦礫の中にアルバムや写真を見つけると、道路端にそれらを大切にまとめて置いてくれるようになった。全国から南三陸町に集まったボランティアが、日々、回収や写真洗浄を続けてくれた。

同年5月末、それらを入谷地区の廃校に展示して、住民たちへの返還が開始された。救出した写真は10万枚、アルバムは2千冊に上る。会場にやって来た住民たちは、思い出の写真を一心に探し続けた。



▲2011（平成23）年4月29日、30日に志津川中学校で行われた第1回南三陸復興市では津波で流失した店の名前がテントに取り付けられた。予想をはるかに超えた多くの住民が避難先から集まった。

被災してから約50日後の2011（平成23）年4月29日、30日の2日間にわたり、志津川中学校を会場に、第1回南三陸復興市が開催された。

南三陸町の店主のほとんどが店や自宅、家族や親戚、大切な仲間を失う中、復興市実行委員長の山内正文さんは、「心まで被災者になるな。おれたちがみんなを元気にしなきゃ。なるべく早く復興市をやろう。」といち早く動き出した。震災前に南三陸町の商店街は、全国の商店街と「ぼうさい朝市ネットワーク」を結んでいた。このネットワークに加盟している商店街の人々が、はるか遠方から市の開催に力を貸してくれたのである。とにかくみんなが集まる場を作ろう。その一心で店主たちは動き出した。

第1回の南三陸復興市には、1万5千人の人たちが集り、その多くは住民たちだった。避難して離れ離れになっていた住民たちが、被災後初めて再会し、生きていることを確かめ合った。会場のあちこちで人々は抱き合い、涙を流していた。

ここで「もう一度あなたの店のものを食べたい」という声を聞いた店主たちは、店は地域の人たち同士がふれあえる場でもあるということを再認識した。一時はあきらめかけた人たちが、店や会社を再建しようという勇気を取り戻した。

多くのボランティアや復興を支えようと訪れてくれたみなさんに、復興市の開催は支えられた。

イスラエル医療支援チームの活動



▲活動終了式典で、イスラエル医療支援チームから仮設診療所の鍵が佐藤仁町長に手渡された。
左から2番目は、施設設置を支援した宮城県栗原市、佐藤勇市長（当時）。（2011（平成23）年4月10日）

町内ではすべての医療機関が壊滅した。

2011（平成23）年3月28日から4月10日までの約2週間、イスラエル医療支援チーム約60名（医師14名、看護師7名、その他技師・通訳・運搬スタッフ等）が活動した。活動終了後、使用した医療機器等が南三陸町に寄贈された。災害時の相互支援協定を結んでいる宮城県栗原市が、速やかにプレハブ診療所、発電機、照明設備、給水、仮設トイレ等の提供・設置を行い、この医療支援活動を支えた。

チームは、プレハブ診療所での診療に加え、避難所を巡回したり、往診での妊婦検診、避難所内で活動していた他の医療関係者の依頼による検査などを行った。

活動最終日の同年4月10日夕方に、活動終了式典が行われた。チームのほか、佐藤勇栗原市長（当時）、佐藤仁町長、在日イスラエル大使館関係者等が出席した。チームの一人一人に折り鶴が贈られ、親しくなった子どもたちも駆けつけて見送った。

この建物は、公立志津川病院に引き継がれ、同年4月中旬から臨時診療所となり、ここで外来診療が始められた。

命を守る拠点再生 台湾の熱い友情



▲南三陸病院・総合ケアセンター南三陸の前に設置された台湾への感謝を表す石碑。

2015（平成 27）年 11 月 25 日の落成式には、中華民国紅十字会（台湾赤十字）の王清峰 会長（当時）（右から二番目）も参列した。（右端は梁毅鵬 台北駐日経済文化代表処 顧問（当時） 中央は佐藤仁 南三陸町長 左端は櫻田正壽 南三陸病院長（当時））

2015（平成 27）年 12 月 14 日、「南三陸病院・総合ケアセンター南三陸」が高台の志津川地区に開業した。南三陸町の医療拠点だった公立志津川病院は、5 階建ての建物の 4 階まで浸水し、患者と看護師合わせて 74 人が犠牲になった。

命を守り支える場所の再生が急がれた。新病院は、内科や外科、小児科など 10 科の診療科を備え、病床は 90 床。また、保健福祉課、地域包括支援センター、訪問看護ステーション、南三陸町社会福祉協議会、子育て支援センターなどの機能がこの施設に集約された。

新病院の建設費用を支えたのは、台湾から寄せられた義援金だった。建設費約 56 億円のうち、約 4 割に当たる 22 億 2,000 万円が中華民国紅十字会（台湾赤十字）からの寄付である。



▲南三陸病院・総合ケアセンター南三陸全景

これを機に南三陸町と台湾は相互に訪問し合い、友情を深め合ってきた。台湾から南三陸町観光協会にインターンが派遣されたり、台湾から学生たちが教育旅行で訪れ民泊を体験するなど、住民たちとの交流は深まっている。

農業の復旧 失われた小規模農家の生活文化



▲市街地の手前に見える被災農地は、ほ場整備事業で再生した。

写真提供 宮城県気仙沼地方振興事務所農業農村整備部

南三陸町では、462ヘクタールの農地が浸水被害を受けた。

農業従事者の多くは自宅のそばに農地を所有し、主に自家用野菜を栽培して自給していた。自家消費しきれない野菜を近所や親戚などに配り合う生活文化が根付いており、作物のやりとりを通して、事ある毎に助け合う顔の見えるコミュニティが育まれていた。

しかし、住民たちは津波被害をきっかけに高台移転を余儀なくされ、農地と離れざるを得なかったことから、農作物の栽培は行われなくなり、作物をやりとりする生活文化も失われてしまった。

農地の復旧に関してもこれまでの農地経営とは異なる道を選択せざるを得なかった。個別の小規模農家にとっては、自宅も再建しなければならない中、農業機械や農業施設の再整備への投資は困難だった。そのため、南三陸町では可能な限り農地を集約しながら、ほ場整備事業などを進めることにより、農地の有効活用と効率的な営農促進を進めた。

整備済み農地面積の約66%の181ヘクタールで営農は再開された。そのうちの86ヘクタールは、ほ場整備事業を導入して再生した。

商業の復興 手を取り合って立ち上がった事業者たち



▲福興市は、毎月大勢の来場者でにぎわった。(2011（平成23）年11月4日)

南三陸町の6割の建物が被害を受けたことによりほとんどの店舗が失われ、商業の再建は、極めて困難と思えた。事業者たちはさまざまな補助事業を活用し、事業者同士助け合い協力し合いながら、再建へと歩み始めた。

中小企業基盤整備機構による仮設商店街への支援やグループ事業補助金は大きな力になった。複数の事業者がグループを組織し、互いに知恵を出し合い経営計画を立て、再建への足がかりにした。

一時は、再建を断念した経営者たちも「もう一度やってみよう」と前向きな気持ちを取り戻すことができた。それに加えて、多くのボランティアが南三陸町を訪れて積極的な消費行動を進めてくれたことや被災地のものを購入して支えようという社会の流れが、経営再建を後押しした。

特に南三陸福興市や仮設商店街は、事業者たちが持ち前の明るさとおもてなし精神を遺憾なく発揮する場となった。手を取り合って頑張る事業者たちの姿に多くの人たちが心を動かされ、交流が深まる好循環が生み出された。その交流は、南三陸ファンを全国に作り出すことにつながり、事業の再生を助けるだけでなく、まちづくりの活力にもなった。

志津川地区の仮設南三陸さんさん商店街は、被災地の復興をリードする商店街として数々の表彰を受け、天皇陛下にも行幸いただいた。

この実績を本設商店街につないで、人と人との出会いと笑顔を生み出す場として、心あたたまる商店街を目指し続けている。



▲2017（平成29）年3月3日に本設の南三陸さんさん商店街がオープンした。



▲8店舗でスタートしたハマーレ歌津は、開放的な雰囲気のお店街となった。

水産業の復興

仲間たちと力を合わせて辿った復興への道



▲2013（平成 25）年 2 月、戸倉地区水戸辺漁港では毎朝のように「がんばる養殖事業」に参画した漁業者たちによるワカメの湯通し作業が行われていた。

南三陸町の基幹産業である水産業は、津波被害でかつてない危機に陥った。

町の水産業は、ギンザケ、カキ、ホタテ、ワカメ、ホヤの養殖業に加え、イサダ、ミズダコ、マダラ、秋鮭の水揚げが主軸で、中でも秋鮭は孵化放流事業により県内 1～2 位の水揚げを誇っていた。

しかし、養殖施設、漁船、漁業資材や水産物共同処理施設などが津波で全壊し、漁港や魚市場などの水産業に関わるあらゆるインフラも流失した。さらに、漁業者たちの多くは、自宅も失っていた。

生業の場や道具、暮らしの場などすべてが失われ、誰もが本当に復旧できるのかと思った。しかし、漁業者たちは、海に出ることさえできれば必ずやり直せると信じていた。

やがて国は、漁業者が共同利用する船の再建に 6 分の 5 を補助する「共同利用漁船等復旧支援対策事業」や共同経営の養殖事業を支援する「がんばる養殖事業」などの補助事業を立ち上げた。漁業者たちは、みんなで話し合いながら補助を活用し、生業を再生した。養殖の共同経営体毎に補助を受けることになるため、漁業者たちは、共同経営を一定期間行うことになった。それは、持続可能な養殖体制や海の環境づくりについて、みんなで話し合い考え直す好機となった。

戸倉地区では、地域住民同士で生活や仕事、祭りの運営などを助け合う「講」の伝統が継承されていた。カキ生産者たちは、未来に豊かな海をつなぐためにカキの養殖筏の数を 3 分の 1 に減らし、環境負荷を抑制しようという思い切った決断に至った。そして、震災前以上に経営を好転することに成功した。

この戸倉かき生産部会は、2016（平成 28）年に日本初の ASC 認証を取得し、2019（令和元）年 11 月 14 日には、農林水産祭天皇杯受賞の栄誉に輝いた。元通りの復旧ではなく、未来を見据えた先進的な取り組みで、一躍日本の養殖界のトップランナーとなった。

新たな産業創造のきっかけを生み出した企業の支援



▲植樹作業を行う企業ボランティアのみなさん。
漁業や農業への支援活動も町内各地で繰り広げられた。



▲イベントの後方支援を行うボランティアのみなさん。
息の長い交流が今も続く。写真提供 南三陸町観光協会

震災後多くの企業から、水・食料・生活物資の支援に始まり、イベントの後方支援、森づくりや水産業の復興支援、観光交流拠点支援、住民のための福祉支援など、多岐にわたり大きな力をいただいた。

2011（平成23）年4月28日から6月30日までの63日間、除雪車を利用して、避難所の風呂にお湯を提供する企業支援が続けられた。このお風呂は延べ2,237名に利用され、住民たちは、ひとときの安らぎを得ることができた。

海水を真水に変える機械を提供してくれた企業もあり、水道の復旧に苦慮していた南三陸町に、いち早く命の水の支援をいただいた。

林道整備や植樹などの森づくりにも継続的な支援をいただき、間伐材などで木のグッズ作りを行う取り組みは、環境保全や新たな産業の醸成にもつながっている。

イベントを継続支援してくれた企業とは、復興連携協定を締結し、南三陸町観光協会のマーケティング業務の支援や、ICT（情報通信技術）を通じたまちづくりに寄与いただいている。

また、震災直後、社員が南三陸町にボランティアとして訪れたことがきっかけで、交流が始まった企業もある。「大切なのは、“支援する”ことではなく、交流を生み人の輪を広げていくこと」という気づきから、「人同士、地域間、人と未来との橋渡しをする」というコンセプトのレストランが東京に誕生し、そこでは、南三陸町産の食材が使われている。

企業が提供してくれた観光交流拠点となる建物では、多彩な交流が繰り広げられ、町と住民の活力を創り出した。

企業人たちの専門知識と住民たちを元気づけようという熱い思いは、南三陸町に新たな産業創造のきっかけをもたらした。彼らとの交流を通して、未来を見据えた持続可能な産業へのビジョンが次々と生まれた。



◀南三陸町の食材を使用したメニューを提供する東京のレストラン



◀南三陸町観光協会の拠点となった南三陸ポータルセンターは、企業支援のもと建設された。ここでは多彩な催しや交流イベントが行われた。

写真提供 南三陸町観光協会

命を救った災害時の相互応援協定 友好町 山形県庄内町の熱い支援



▲庄内町のみなさんによる炊き出し支援（歌津地区）

写真提供 山形県庄内町

水、食糧、電気など命を支えるすべてのものが途絶えた南三陸町で、速やかに救援活動を展開してくれたのは、東日本大震災で被災しなかった震源地から遠い自治体だった。

友好町盟約書を交わし、災害時の相互応援協定を結んでいた山形県庄内町の先遣救援隊は、2011（平成23）年3月13日の朝、毛布50枚、肌着50組、水を積んで南三陸町に向かった。到着した南三陸町は、変わり果てていた。南三陸町長、副町長に面会し、必要な物資を聞き取り、翌14日から本格的な支援が始まった。

毎日4トン車2台に水、おにぎり、無洗米を積んで、片道5時間以上の距離を走った。同年3月末までの毎日、8,000個のおにぎり、1トンの水が、この距離を越えて届けられた。時に凍結する山越えの道を走り、届けられたおにぎりの数は延べ10万個にのぼる。

応急的な支援が一段落して、庄内町と庄内町社会福祉協議会の共催で「南三陸町復興支援災害ボランティア」が組織され、「心の支えになろう」とバスを用いたのボランティア支援が行われるようになった。また、南三陸町の住民や子どもたちを庄内町に招くなど、心通い合う交流が続けられた。

以前から旧歌津町と旧立川町の小学校では交流が行われており、両町民の交流の土台があったことから、今回の大災害に際して、相互応援協定は、迅速かつ的確にその機能を発揮することができた。

住民を勇気づけたボランティアのみなさんの姿



▲ 2011（平成 23）年 9 月 28 日午前 9 時過ぎ、災害ボランティアセンターの前には多くのボランティアが集合していた。

写真提供 南三陸町社会福祉協議会

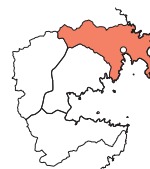
2011（平成 23）年 3 月 26 日、南三陸町社会福祉協議会は、山形県社会福祉協議会と大阪府の堺市社会福祉協議会の支援を受けてベイサイドアリーナの敷地内に災害ボランティアセンターを立ち上げた。

全国から集まった個人のボランティアに加え、企業名の入ったビブスを身に着けた企業ボランティアや NPO、NGO などが毎朝、災害ボランティアセンターの前に行列を作った。災害ボランティアセンターは、2016（平成 28）年 3 月までに延べ 15 万 1,000 人のボランティアを受け入れた。災害ボランティアセンターで受付せずに直接活動したボランティアを含めると 20 万人以上の人々が南三陸町で何らかの支援活動を行っており、10 年を過ぎても支援活動を続けている団体や個人も多い。

被災した住民たちが仮設住宅に落ち着いて以降、ボランティアは、産業支援の作業に移行した。海浜・田畑の瓦礫撤去、漁具などの整備、漁港の復旧から始まり、農業では種まきや草取り、収穫の支援、水産業ではワカメの収穫支援など多岐に渡る作業をお手伝いいただいた。

南三陸町の漁業者たちは、ボランティアのみなさんが収穫したてのワカメの味に感動するのを目の当たりにして、自らの生業の価値を再認識した。ボランティアの存在は、私たちの復興の大きな力となった。絶望のどん底にいた私たちにくるさとへの誇りを見出させ、決してあきらめず奮い立たせる力を与えて続けてくれたのは、南三陸町に通い続けてくれたボランティアのみなさんにほかならなかった。

ポストがつないだ絆



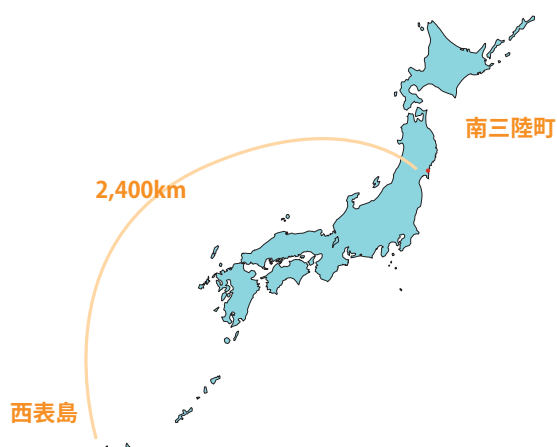
▲南三陸町歌津から流されたポストが太平洋を漂流後、沖縄の人たちの支援で歌津に返還された。写真提供 (株)南三陸まちづくり未来

南三陸町では、東日本大震災で発生した大津波により、多くの命や思い出のつまった様々なものが海へ流されていった。歌津地区のコンビニエンスストアの前にあった郵便ポストもそのひとつだった。変わり果てた南三陸町の姿を悲痛な思いで見つめながら、なんとかふるさとを復興させたいと歩んでいた住民たちのもとに、信じられないようなニュースが飛び込んだ。

歌津地区から津波で海に流されたポストが、太平洋を1年9カ月漂流した末に2,400キロメートルも離れた沖縄県の西表島北東部ユツン川河口付近に流れ着いた。

砂まみれで傷だらけになったそのポストは、沖縄の多くの方々の尽力により、2013（平成25）年8月11日、歌津に返還された。たった一つのポストを宝物を扱うように返還してくれた沖縄の人たちのやさしさが、私たちの胸を打った。このニュースは全国の人たちにも大きな感動を与えた。

ポストがつないだ絆を祝おうと住民たちの手で「歌津復興夏まつり」が開催された。手紙が入っていないなくてもポストは目には見えないあたたかなメッセージを届けてくれた。沖縄と歌津地区の住民たちの心が強い絆で結ばれた。



オーストラリア ギラード首相訪問

「不屈の精神感じた」



▲佐藤町長の案内で壊滅した町を視察する、ジュリア・ギラードオーストラリア首相（当時）。

写真提供 オーストラリア大使館

2011（平成 23）年 4 月 23 日午前、オーストラリアのジュリア・ギラード首相（当時）が南三陸町を訪問した。佐藤仁町長らの案内で津波で破壊された市街地を視察し、避難所になっているベイサイドアリーナを訪れ、靴を脱いで被災した住民たちに歩み寄り、激励した。また、コアラやカンガルーのぬいぐるみやお菓子を子どもたちにプレゼントした。

オーストラリアは震災直後の 3 月 16 ～ 19 日に救助隊員 76 人と救助犬 2 匹を南三陸町に派遣し、救援活動を実施した。

ギラード首相は、「このような惨状で多くの人が助かったのは奇跡。避難所で住民と触れ合い、日本人の不屈の精神と勇敢さを感じた。」と話した。（河北新報 4 月 24 日朝刊より抜粋）

図書館として活用された「コアラ館」もオーストラリア・ニュージーランド銀行からの支援である。

天皇皇后両陛下のご訪問



▲避難所になっていた南三陸町立歌津中学校で、被災した住民に声をかける天皇皇后両陛下。

写真提供 河北新報社

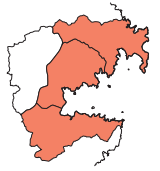
2011（平成 23）年 4 月 27 日、津波の爪痕が生々しい南三陸町を天皇皇后両陛下（現上皇ご夫妻）が訪れた。伊里前小学校の校庭から壊滅した市街地を視察され、両陛下は海に向かって黙礼された。

避難所になっていた歌津中学校では、被災者の元に歩み寄って畳の上に膝をつかれ、被災した住民たちと目線を同じにして、気遣うお言葉を 30 分以上もかけられた。この日は、予定を 10 分ほど延長してお見舞いとなった。お言葉をかけられた住民たちは、「感謝でいっぱい。これを励みに前を向いて頑張りたい。」と涙を流した。

その 3 年後の夏、両陛下は再び南三陸町を訪問。志津川地区の仮設南三陸さんさん商店街を視察され、商店主に励ましのお言葉をかけられた。

天皇皇后両陛下がいつも被災地に心を寄せてくださっていることが、被災した住民たちの心を今も支え続けている。

津波が結んだチリとの友情



▲2013年5月イースター島の人々の手で作られたモアイ像が南三陸町に贈られた。

写真提供 南三陸町観光協会

約17,000キロメートルの距離を越えて、南三陸町とチリは、友好関係を深めてきた。そのきっかけは、南三陸町で41名が犠牲となった1960（昭和35）年5月24日のチリ地震津波だった。この津波の記憶を未来に伝えようと、30年後の1990（平成2）年に国鳥コンドルの碑がチリから贈られ、1991（平成3）年には南三陸町がチリ人彫刻家に依頼して作ったイースター島のモアイが、志津川地区の松原公園に設置された。

震災直後の2011（平成23）年4月28日、チリ共和国パトリシオ・トーレス在日大使（当時）は自ら車を運転して南三陸町を訪問。志津川中学校に立ち寄って生徒や教職員にお菓子を贈り、同年6月1日にも再訪して生徒たちを励ました。また、2012（平成24）年3月30日にはセバスティアン・ピニェラ大統領（当時）が町を訪れ、新たなモアイ像の寄贈を約束した。東日本大震災で壊滅した町に新たなモアイ像を贈ろうと、日智経済委員会チリ国内委員会はイースター島の長老会に協力を求めた。

イースター島の石に彫られた、高さ3m重さ2tの巨大なモアイ像は、島外に出たことはない。2013（平成25）年5月に南三陸町に寄贈されたモアイが、史上初めて島外に出た貴重なモアイ像である。

「モアイ」は、イースター島のラパ・ヌイ語で「未来に生きる」という意味だ。未来に生きる南三陸町の人々を、遠い未来まで勇気づけ、見守り続けることだろう。

全世界からの心あたたまる大きな支援 子どもたちへのエール



▲国際的な NGO からも多大なご支援をいただき子どもたちの教育環境が再生していった。
足繁く町を訪れ、子どもたちを励まし続けてくれたサッカーの長谷部誠さんとボールを追いかける子どもたち。

写真提供 ©日本ユニセフ協会 /2011/satomi matsui

津波に何もかも流され、一時は絶望のどん底にいた私たちに寄せられた寄付や寄贈は枚挙にいとまがない。大企業や国際的な NGO からの寄付もあれば、子どもたちがお小遣いを出し合って集めてくれた募金もあった。私たちが思いやるあたたかいメッセージや復興を祈る千羽鶴…。全世界からいただいた有形無形のご支援に「私たちはひとりじゃない」「あきらめずにがんばろう」と何度思ったことだろう。それが“エネルギーのもと”となり、私たちは頑張ることができた。

町の未来を担う子どもたちにも、多くの心あたたまる支援が寄せられた。当たり前の日常を奪われた子どもたちを心配し、少しでも心なごむ環境をと、民間、公立を問わず、教育施設や遊具の再建などをご支援いただいたほか、各界のプロスポーツ選手たちが次々と子どもたちのもとを訪れ、彼らの心に残る交流の機会をいただいた。

全壊した南三陸町学校給食センターは、NGO や自治体からのご支援により 2018（平成 30）年 3 月に再建され、町立小学校 5 校、中学校 2 校の子どもたちに、より安全で安心な学校給食の提供を開始することができた。

また、震災直後から町内の子どもたちに絵本の読み聞かせをしたり、おもちゃや農作物などの差し入れのために通い続けてくれたボランティアもいた。

派遣職員の力に支えられて 即戦力となったエキスパートたち



▲派遣職員のみなさんによる年度末の記念撮影。 2018（平成30）年3月23日

行政機能が壊滅状態になった私たちの町を支えてくれたのは、全国の自治体が派遣してくれた応援職員の力だった。

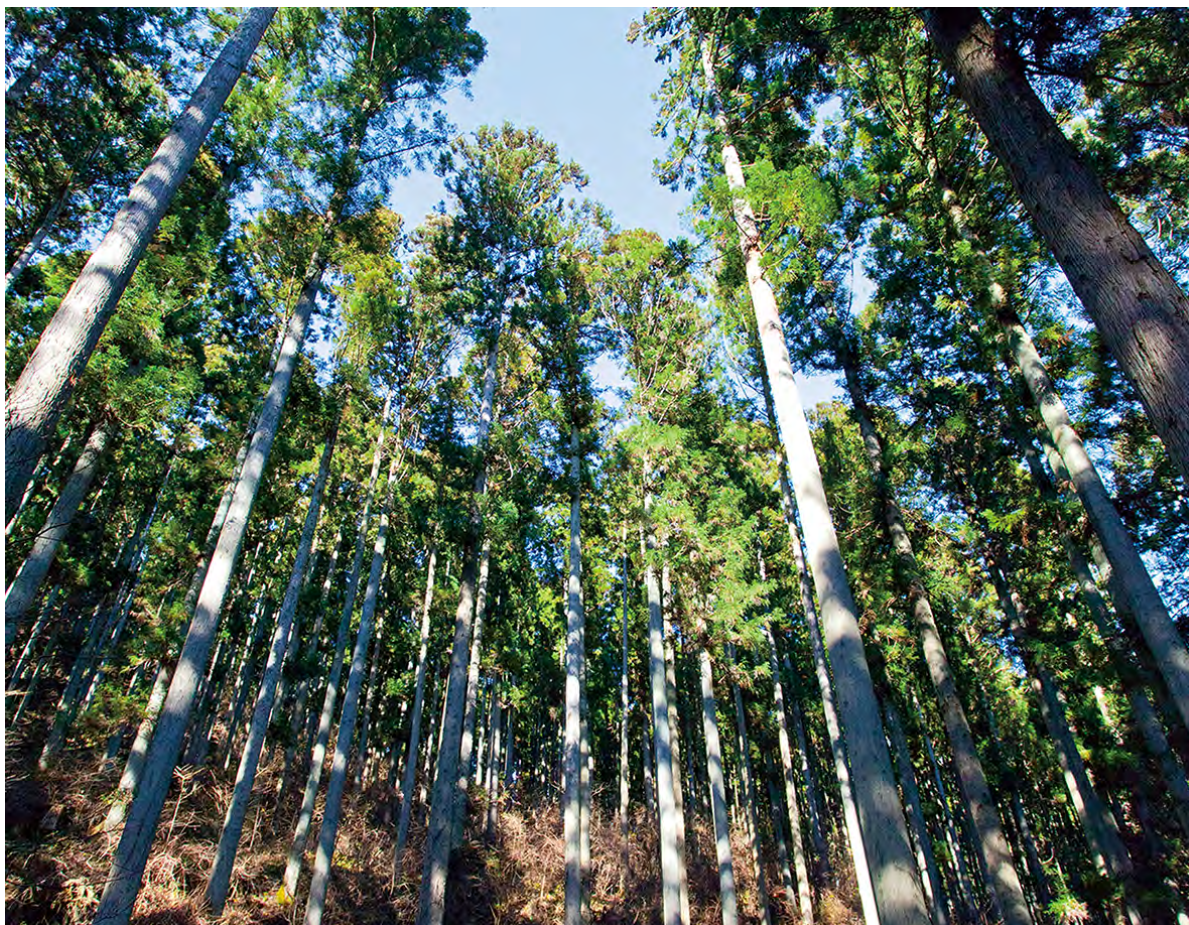
被災から10日が経った頃、関西広域連合の兵庫県・徳島県を皮切りに、全国から自治体名のビブスを着けた緊急応援職員たちが次々と到着し、地元職員に交じって罹災証明書の発行作業などを手伝ってくれた。岩手県一関市に宿をとり、交通事情も劣悪な中、通常なら1時間もあれば通える道のりを2時間以上かけて通い続けた職員もいた。座席を取り払ったマイクロバスの車中に寝泊まりしながら仕事をした職員もいた。

5月になると、地方自治法に基づく長期にわたる職員派遣も始まった。派遣してくれた自治体は79、派遣職員数は521人、延べ746人（令和3年3月末時点）にのぼった。

応援職員たちは、被災後の厳しい生活環境を覚悟し、壊滅した町の再建という過酷な仕事に手を挙げて志願してくれた勇敢な方々である。雪が降らない地域から来た職員は慣れない雪道の運転に疲れ、聞き慣れない方言で話される電話に四苦八苦した。各地から参集した見ず知らずの職員たちが力を合わせて南三陸町の再建に尽くしてくれる情熱とやさしさ。それは地元職員にとってどんなに有り難かったことか。彼らの心意気に何度となく涙した日々だった。震災後の復旧・復興に係る膨大な仕事は、この応援職員の力がなければ到底こなすことはできなかった。

行政事務のエキスパートたちはそれぞれの出身地と南三陸町を結んだ。災害は時と場所を選ばず、突然やって来る。その時、このネットワークは共に助け合う命の糸となるに違いない。

林業の復興 「いのちめぐるまち」を具現化する業態へ



▲山主たちの手で管理されてきた南三陸の杉美林

写真提供 南三陸町観光協会

南三陸町は良質な杉材の生産地で知られる林業の町でもある。津波で製材所が全壊し、林業も危機的状態に陥った。しかし、先人たちの代から守られて何十年もの年輪を刻んできた森林は、震災前と変わらなかった。その力強い姿を見た林業関係者は手を取り合って立ち上がった。「豊かな海を維持するためにも林業は頑張らなくちゃいけない」という思いだったという。

町境がほぼ分水嶺と重なる南三陸町では、海、里、山がつながっている。湾内で養殖されるカキなどは山からの水に含まれる豊かな滋養で育ち、木は海からあがる霧の水分やミネラルで育てられる。2015（平成 27）年、町内の林業関係者が連携して、日本で 35 件目、宮城県で初めての F S C 国際認証を取得した。現在は町の約 12,000ha の森林のうち、約 2,470ha が国際認証林となっている。収益をあげる生業というだけでなく、多様な生物が生息する森林にしていくことで、海を含めた生命の循環を質の高いものにしていくという挑戦が続いている。

南三陸杉は生長が早く、強度に優れ、ピンクがかった美しい色が特長だ。製材、建設、プロダクト製作などの町内事業者とも連携して、CoC 認証を取得。南三陸杉の国際認証材を製品化して、広く流通させる体制も整った。

再建された南三陸町役場本庁舎と歌津総合支所には、主要な建材に FSC 認証杉材を 100% 使用し、日本で初めて FSC® 全体プロジェクト認証を取得した公共施設となった。

CoC 認証… 森林管理（FM）認証を受けた森林から産出された木材・紙製品を適切に管理・加工していることを認証する制度